発掘調査の概要

川原寺寺域北限（飛鳥藤原第119－5次）

史跡「川原寺」地内の北端で、2月から園地整備に伴う確認調査をおこなっています。調査面積は307㎡に過ぎませんが、遺構の密度は高く、当初予想しなかった重要な発見が相次いでいます。

川原寺は斉明天皇の川原宮の故地に、その子である天智天皇が創建したと考えられている寺です。7世紀末頃には、飛鳥寺・大官大寺・薬師寺とならんで四大寺とされました。1957～59年の奈良国立文化財研究所による調査で、1塔2金堂形式の伽藍配置が明らかになっています。

今回の調査での最大の成果は、川原寺の北面大垣を確認し、寺域の南北の規模が飛鳥寺と同じく3町（330m）であると確定したことと、寺域北部で寺院付属工房を発見したことです。

調査区内には金属加工の炉跡が多数あり、大量の鉱滓が出土しました。炉跡群は川原寺の創建期（7世紀後半）から平安後期に及び、継続的に工房が営まれた様子がうかがえます。また調査区中央では、融着した瓦が多量に出土したため、西側の丘陵斜面には瓦窯があると推定できます。

調査区南半の丘陵裾には、巨大な鋳造土坑があり、科学分析と鋳型の形から、鉄釜を鋳造した土坑と判明しました。また南端には、鉄釜鋳造に用いた溶解炉片が一括投棄されていました。これらの年代は7世紀末頃で、鋳鉄遺構としては最古です。奈良時代には、この鋳造土坑を壊して建物が建てられました。

6月9・10日におこなった現地見学会では、平日にもかかわらず1,350人余りが詰めかけ、古代の技術の高さに感嘆の声をあげていました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　冨永里菜）

現地見学会の様子